
黒ウサギと旅物語

久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒ウサギと旅物語

【Nコード】

N9669Y

【作者名】

久遠

【あらすじ】

白ウサギの代わりに黒ウサギに出会ってしまつ。

ごく普通のヒロインは黒ウサギにつられておとぎの国で行方不明のアリスを探すことになってしまつが・・・

見つけた

あの日、私は家に帰ろうとしていた。

いつもより遅い電車に乗り帰る予定だった。

日の入りが徐々に早まる秋のことだった。

私はいつものように駅に向かっていった。

商店街側ではなく人氣が少ない脇道を歩いていくのが普通だった。

そんな脇道に外灯があるわけなく辺りは暗かった。

月の明かりが冷たくけれど優しく私を照らしてくれるくらいだった。

寒さに身を固めながら私は早めに足を進めていた。

するとなにかに足をつまづかせ私は転んでしまった。

「なに？」

暗い足元をじっと見つめるとそこには暗闇よりも暗い得体の知れないものがあつた。

私は戸惑いながらその物体を触ってみる。

動物のように柔らかく毛があつた。

持ち上げたとしても小型犬と変わらないかそれより小さいだろう。

「いや、すみません。大丈夫ですか？」

私が触っていた動物はいきなり話し出した。

驚きのあまり私はなにも言えないまま黙り込み、その動物との距離を置く。

「大丈夫ですか？」

「わけのわからない動物が喋った！」

私は声を張り上げながら言葉を放つ。
徐々に月の明かりがその動物に当たるようになり、ようやく姿が露
になった。

「う、ウサギ？」

「はい。私はカルト・ロイヒテン・ブーゲンビリアと申します。あ
なたは？」

もちつきくおん
「望月久遠」

黒いウサギは自分の名前を名乗り私の名前も聞いてきた。
私は流れに任せて名前を教えてしまった。

「久遠……？また変わったお名前で」

「あんたもね」

ウサギに変わった名前なんて言われる筋合いは無いと思いながら私
はウサギが話を聞く。
よくウサギを見ればおとぎ話の不思議の国のアリスに出てくる白ウ
サギのようだった。

「私はいなくなられたアリスを探しているんです」

「アリス？勝手に探せばいいじゃない」

黒ウサギは私に自分の使命を喋りだす。

私に関係ないと思っていると黒ウサギは驚愕の一言を発した。

「久遠さん！アリス探しを手伝ってください」

黒ウサギは私の腕を掴みながら今まで無かった黒い穴に入る。

腕を掴まれている私も穴に落ちることになる。
落下していることに私は悲鳴をあげていると黒ウサギが急に人間に
姿を変えた。

黒髪に宝石のように輝く紅い瞳はどこから見ても美青年だった。

「えっ？」

「これが本来の姿なんですよ」

驚くことばかりで私は言葉を失いかけていた。

ただ叫ぶことも止め落下していくのを体で感じるだけだった。

「アリス探しってどういうことなの？」

「それはハートの城についてからお話ししましょう」

下を見れば光が差し込んできていた。

出口はもうすぐのようだった。

私はウサギの腕を掴み固く目を閉じる。

「大丈夫ですか？」

「えっ？」

固く閉じていた目を開くとそこは中世ヨーロッパのような建物が連
なる街があった。

一体、目を閉じていた一瞬でなにがあったのか理解しがたい光景だ
った。

空を見上げても黒い穴は無い。

「カルト様！お帰りになられたのですか」

「ええ……馬車の手配をお願いします」

彼は近くにいた衛兵に言くと衛兵は敬礼をした後に私たちの前から消え去った。

しばらくしないうちに馬車が一台、私たちの前にやって来た。

「あの……」

「なんですか？」

「どうして、アリスを探すの？物語じゃアリスは家に帰ったんじゃない？」

記憶の奥底にある不思議の国のアリスを思い出してもアリスを探すことはありえなかった。

私は率直に思った素朴な疑問を黒ウサギにぶつけると彼は黙り込んでしまった。

「すべて城に着けばわかりますよ」

そう言っつて馬車に揺られること30分ほどが経過した。

馬車の窓から顔を出してみると大きなお城が見えてきた。

どうやらあれがハートの城らしい。

絵本で見たのよりも現実味があるように見えた。

「カルト、戻っておったのか」

「はい。女王様」

謁見室まで行くとそこには女性が一人だけ玉座に座り扇で顔の半分を隠していた。

黒ウサギが女王様と言っただから彼女が女王らしい。

「そこにおる小娘は？」

「アリス探しを手伝ってくれる人間で久遠といます」

「久遠、珍しい名前だな。男なのか？」
「私はれっきとした女です」

名前で男と思われるのは慣れていから適当にあしらい私はどうして、アリスを探しているのか女王に尋ねる。

すると、女王は今まで顔を隠すために使っていた扇をしまった。表れたのは思ったよりも若く私と年も変わらなそうだった。

「私は初代アリス。探しているのは二代目アリス」

「なんなの初代アリスって……それに二代目って？」

「アリスという名前は気質を持つ少女に受け渡されていく。私もその一人だったということだよ。久遠」

話が呑み込めないまま私は女王の話を聞くしかなかった。

なんでも、二代目アリスが姿を消したのは今から16年も前らしい。当時は赤子の誘拐として衛兵が出回るだけだった。

だが、誘拐されたのがアリスだとしり城中のものが探し回ったが見つからなかった。

「どうして、16年経った今なの？」

「私ももう若くは無い。16歳でアリスに私の座を受け渡すと決めていた」

「つまりはアリスに王位を継がせるために見つけるってわけ？」

「そうだ」

私は断ることがどうしてもできずに手伝うと言ってしまった。

女王は笑顔で立ち上がり私のもとへ駆け寄った。

「カルト一人では不安だったから久遠がいてくれるなら安心だ。今日はゆっくり休むといい」

こうして私と黒ウサギのアリス探しの旅は始まったのだった。

続。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9669y/>

黒ウサギと旅物語

2011年11月29日00時57分発行